

書くこと

空工

一つの作品を書き上げると、その作品に対して不安な気持ちが起こってくる。これがどれほどの価値が有る物だろうか、という思いになる。書いている途中はそのようなことは余り思わないのだが、書き上げてしまうと不安になるのである。それで改めて自分の姿を見ていくのである。何の為に自分はこのような作品を書いているのか。誰に向かって示そうとしているのか。

自分は自然を表わしたい。自然とは何か。自分とは何か。自然に付いては科学的にかなりのところまで分かってくる。しかしやはりどうしてこのように存在しているのか、というところまでは解明されていない。目的を持って自然は存在しているのだろうか。それとも唯無目的に在るだけなのだろうか。それにしても在るとはどういうことなのだろうか。誰しもその答えをまだ見出してはいない。

自然には心があると私は思っている。宇宙には心があるのだ。夜空の星達は美しい。自然現象もそうだ。もちろん恐ろしい現象もある。美も醜も自然の中にある。無機物か

ら有機物、高等動物へと生き物は進化していつている。そのような中で人間の存在は小さい。在っても無くてもいいような物かもしれない。そう思う一方で、否そうではないのだ、私の中にも宇宙が在るのだ。無限の宇宙が広がっている。私の中に。

書いていくうちに自然と物語が生まれてくる。そのような方法で私書き続けていこうと思っている。